

# しょうれん 力障連「わ」会 報

http://challenged-catholic.net/ No.99 2023. 9.19 発行

二〇二三年九月十九日発行（毎週火曜日）増刊AJU一四九七二号 昭和五十四年八月一日 低料第三種郵便物承認 定価一〇〇円

## 目次

かんとうげん 巻頭言	あなた <small>てんまく</small> の天幕 <small>（テント）</small> に場所 <small>（ばしょ）</small> を広く取りなさい <small>（ひろと）</small>	しょうれんきょうりよくしさい 力障連協力司祭	はなふさ 英	りゅういちろう 隆一朗	しんぶ 神父	1		
ながさきたいかいじゅんびじょうきょう 長崎大会準備状況	しょうれんながさきぜんこくたいかいじっこういんかい 力障連長崎全国大会実行委員会	じむきょくちょう 事務局長	かたおが 片岡	ひでかず 英和		2		
おほ 多くの人に導かれて	おほ 多くの人に導かれて	きょうかい 教会における	しょうがいしゃかつどう 障害者活動	しょうれん （力障連）	しよだいかいちよう 初代会長	やまだ 山田	あきよし 昭義	3
しょうれん 力障連	ねんかん 41年間の	おも 主な	かつどう 活動	しょうれん （力障連）	しよだいかいちよう 初代会長	やまだ 山田	あきよし 昭義	8
まえ 前の	じぶん 自分より	ひと いい	ひと 人に	ぜん （前）	しょうれんかいちよう 力障連会長	みやなが 宮永	ひさと 久人	8

## かんとうげん 巻頭言

### あなたてんまくの天幕（テント）に 場所（ばしょ）を広く取りなさい（ひろと）

しょうれんきょうりよくしさい  
力障連協力司祭

おかげさまで、長崎教区にて、力障連の全国大会が久しぶりに開催されることになりました。コロナ禍があったものの関係者の尽力のおかげで何とか開催できそうで、ほっとしています。長崎教区の皆さま、ありがとうございます。大会で皆さんと顔を合わせることができることを楽しみにしています。

さて、ご存じのことと思いますが、長い準備を経て、今年の10月にシノドス会議（第1期）が開かれます。長崎の全国大会と同じ時期に行われるのは何か感慨深いです。

シノドス（ともに歩む）の精神を私たちも生きていきましょう。冒頭のタイトルにあげたのは、昨年秋に出たシノドスの準備文書のタイトルです。「あなたてんまくの天幕（ばしょ）に場所（ひろと）を広く取り、あなたの住まいの幕を広げ、惜しまず綱を伸ばし、杭を堅く打て」（イザヤ54, 2）から引用されています。この言葉は、バビロン捕囚中の民に向かって、パレスチナに戻る準備を促し、喜びと希望のしるしを告げています。

アフターコロナの時期にあたり、私たちも力障連という天幕を広げていく気持ちを新たにしたらどうでしょうか。コロナ明けの教会を見ていると、教会というテントはむしろ縮小している印象です。教会の高齢化と弱体化がより明確になってきたように見えます。以前と同じような活動に戻ることができない教会も多いでしょう。コロナによって、

きょうかいじたい じゃくたいか いんしやう ぬぐ  
教会自身が弱体化した印象を拭えません。

これは力障連にも当てはまるように見え  
ます。長崎の次の全国大会の開催地がすぐに決  
まりませんでした。会長をはじめ、新しい  
役員の人選も難航して、人材不足を痛感し  
ています。今まで活躍してこられた障害者  
の方々の中では、引退され、帰天された方  
も多いです。また、現役でがんばっておら  
れる方々も70歳以上という方が多くかなり  
高齢化している印象です。そして、障害をもつ  
た当事者の方々の中に、若者の姿があまり見  
られないことに危機感をもっています。

今は、天幕（テント）そのものを張り直す  
時かもしれません。天幕はいつも移動するも  
のです。私たちは旅をしながら、その折々で  
テントを広げます。そして、以下のことを心  
がけていきましょう。

1. テントを広げるための場所を確保する：  
障害者が集まる集いを復活させましょう。
2. 大きなテントを張っていく：障害のある  
新しい人をその集いに招き入れましょう。
3. 綱を伸ばし、杭を打つこと：皆をつな  
いだり、核になる活動や人も必要です。  
組織的なかわりも必要かもしれません。

テントの中心には主の現存があります。い  
つも神に聞きながら、神のみ栄を中心にする  
ことによって、仲間とともに、シノドス（と  
もに歩む）の道を歩んでいきましょう。

## ながさきたいかいじゅんびじょうきょう 長崎大会準備状況

しょうれんながさきぜんこくたいかいじっこういんかい  
カ障連長崎全国大会実行委員会

じむきょくちょう かたおか ひでかず  
事務局長 片岡 英和

だい かい しょうがいしゃれんらくきょうぎかいながさき  
第14回カトリック障害者連絡協議会長崎

ぜんこくたいかい もくぜん せま  
全国大会もいよいよ目前に迫ってきました。

2021年に予定されていた大会が、新型コロナ  
によって延期され、改めて開催を決定した  
のが昨年6月、そこから1年半をかけて準備  
してまいりました。しかし様々な不手際があ  
り、参加を予定していた皆様に様々な苦労を  
おかけしましたこと、この場をお借りいたし  
まして深くお詫び申し上げます。皆様から寄  
せられましたご質問、ご指摘を是正しながら  
大会に臨んでまいりたいと考えております。

長崎においては現在大会実行委員会の動き  
も大詰めで教区内への呼びかけ、担当部署  
ごとの準備等目まぐるしく動いております。  
長崎での大会開催は初めてですの手探り  
状態でしたが、教区内にも障害者に携わる人  
も多く、また同種の大会にも携わった経験者  
などもまして大変に助かっております。こ  
ういった人たちが普段から教区内で活動して  
いたことを知ると、いかに自身が障害者のこ  
とに目を向けていなかったのかがわかります。  
これは多くの人の「障害者」への認識にも  
通ずるものがあると思います。障害者はど  
この教会にもいます。しかし多くの人はその  
ことを認識していません。「知ろう」として  
いないからです。知ろうとしなければ知りえ  
ない、理屈としては簡単な話ですがそれで良  
いはずがありません。そのことを知らなけれ  
ば対応が出来ないからです。現在障害者とい  
う概念が「医療的モデル」から「社会的モデ  
ル」へと変化してきています。簡単な例を挙  
げるとバリアフリーなどが当てはまります。  
くるま りりょう かた だんさ  
車いすを利用している方は段差などあると  
つこう しょうがい だんさ  
通行の「障害」になります。しかしその段差  
がなければ障害なくスムーズに移動が出来ま  
す。つまり段差という障害を取り除くことで

くるま りよう かた いっぱん ひと なん  
車いすを利用していても一般の人と何の  
かわ いどう しゃかい しょうがい  
変わりもなく移動ができるわけで「社会が障害  
をつく しょうがいしゃ  
を作っている」わけです。すべての障害者に  
たい こうず な た  
対しこの構図が成り立つわけではありません  
が、少なくとも障害者の立場に寄り添い障害  
をなくしていくことはできるはずですが、  
しこのことも障害者のことを知らなくては  
できません。そのために「知ろう」ということ  
がとても大事なことになると思います。そし  
てしょうがいしゃ し きかい  
て障害者のことを知る機会となるために、こ  
のぜんこくたいかい わたし おも  
の全国大会があると私は思います。

しょうがいしゃ ぜんこくたいかい き しょうがいしゃ  
障害者のための全国大会と聞くと、障害者  
自身が何かをやるための大会と考えがちで  
す。じっさい わたし しょうがいしゃ  
実際に私もそうでした。もちろん障害者  
自身が声を上げる大会でもありますが、それ  
だけではありません。先に述べた障害者を知  
るためのたいかい さまざま  
大会でもあるのです。すでに様々  
なちいき もう こ なか  
な地域から申し込みをいただき、その中で  
さまざま しょうがい も かた じぶん  
様々な障害を持った方がおられます。「自分  
はしょうがい も さんか  
は障害など持たないから参加しない」ではな  
くて、しょうがいしゃ ふ あ し  
て、障害者と触れ合って「知ろう」とする  
ことが大事なことです。障害の種類などは  
知識として知っていてもその人たちにとって  
どうということが「障害」となるのか、それは  
じっさい ふ はな  
実際に触れあって話してみなければわかりま  
せん。じむきょく しつもん とど  
事務局にこういう質問が届きました。  
わたし ぜんもう たいおう  
「私は全盲ですが対応はしてくれますか？」  
「もちろんです。あんない もします しんじ しりょう  
案内もしますし点字の資料  
をじゅんび わたし ちゅうと ぜんもう  
準備しています。」「私は中途の全盲です  
からしんじ よ ちようかく ほう おとろ  
点字は読めません。また聴覚の方も衰えて  
き かんない ほうそう  
聞こえづらくなっていますから館内の放送  
せつび き おも  
設備だと聞きづらいと思います。」「……」

わたし こたえ つ しかく  
私は答えに詰まってしまいました。視覚  
しょうがいちようかくしょうがい たいおう かんが  
障害、聴覚障害と対応を考えていましたが、  
りようほう どうじ も ひと どうぜん  
両方を同時に持っている人も当然いるわけで

す。そこまでのことはあたま なか  
す。そこまでのことは頭の中にありませんで  
した。このことから実際にはじっさい ふ  
した。このことから実際には触れあってみる  
ことこそ大事なことだといえればわたし かん  
ことこそ大事なことだといえれば私は感じま  
した。特に今度のながさきたいかい  
した。特に今度の長崎大会は「インクルーシ  
ブ」をテーマに掲げていますのでどういった  
じょうきょう ひと と のこ みな さんか  
状況の人も取り残さなく皆さんが参加でき  
るようなたいおう かんが おも  
ような対応を考えていきたいと思ひます。

2018年 ねん ぜんかい よこはまたいかい ねん つきひ  
2018年、前回の横浜大会から5年の月日  
を経て行われるながさきたいかい しょうれん  
を経て行われる長崎大会、力障連として  
きゅうしゅう はじ おこな たいかい  
九州で初めて行われる大会であり、それに  
ふさわしくこんご しょうがいしゃ かんけいせい かん  
ふさわしく今後の障害者との関係性を感じる  
ことが出来るような大会になるように、多く  
のみなさま きょうりょく ねが  
の皆様のご協力をよろしくお願ひいたします。

じ き じ  
次ページの記事はオリエン  
しゅうきょうけんきゅうじよ げつ かんし  
宗教研究所のカトリック月刊誌  
「ふくいせんきょう ねん がつごう しょうれん  
「福音宣教」2011年4月号および力障連  
なご やきょうくかいほうだい ごう ねん がつ  
名古屋教区会報第76号（2023年1月17  
にちはっこう けいさい かんけいしゃ  
日発行）で掲載されたものを関係者の  
りようかい え けいさい いた  
了解を得て掲載させて頂きました。  
ないよう どうかい しょうだい やまだ あきよし かいちよう  
内容は当会の初代山田昭義会長が  
せつりつじ じょうきょう おも か  
設立時の状況と意思を書かれたものです。  
げんざいせつりつらい ねん とき なが じょうきょう  
現在設立以来41年の時が流れ、状況  
おも か こんご しょうれん かつどう  
も大きく変わっておりますが、設立時の  
思いを感じ取り、今後の力障連の活動を  
どうすす と  
どう進めていくか問われております。



# おお ひと みちび 多くの人に導かれて

じりつ いえ とも  
AJU 自立の家と共に

だい かい  
第5回

きょうかい しやうがいしやかつどう  
教会における障害者活動

しゃかいふくしほうじん じりつ いえ  
社会福祉法人 AJU 自立の家

やまだ あきよし しやうれんしよだいかいちょう  
山田 昭義 (カ障連初代会長)

## ひっしやしやうかい 筆者紹介

やまだ・あきよし 1942年清須市に生まれる。1982年日本カトリック障害者連絡協議会を設立、初代会長を務めた。1990年社会福祉法人「AJU自立の家」を設立。設立時から2017年まで常務理事や専務理事を務めた。国内の障害者運動のリーダーの一人として知られている。障害があっても暮らしやすい社会実現のために積極的に意見を述べてきた。(2017年9月4日版・中日新聞より)

じやうきひやうだい おお ひと みちび  
上記標題「多くの人に導かれて—AJU自立の家と共に—」の原稿は、オリエンズ宗教研究所のカトリック月刊誌「福音宣教」2011年4月号に掲載されたもの、山田さんおよびオリエンズ宗教研究所の許可を得て転載した。

## しやうれんせつりつ む カ障連設立に向けて

ねん がつ わ くにゆうしらい はじ  
1981年2月、我が国有史以来、初めてローマ教皇が来日されるというニュースは、僕たち信徒にとっては大きな福音だった。将来の

にほんし かなら きさい できごと かくしん  
日本史には必ず記載される出来事と確信し、

れきしてきしゆんかん ぼく しやうにん ひとり さんか  
歴史的瞬間に僕も証人の一人としてぜひ参加

したいと、胸が躍ったことを今も鮮明に覚えて

いる。そして、みぞれが降る後楽園球場で

さむ ふる きやうこう  
寒さに震えながら、パパさま教皇ヨハネ・パ

ウロ二世を僕の眼にしっかりと焼き付けた。

おな ひ きやうかい しやうがいしやうんどう  
同日、教会における障害者運動のリー

ダーが一堂に会し、パパさまの来日を祝い、

これを機に全国の障害者運動の連携を確認

した。日本カトリック障害者連絡協議会は

(以下カ障連という) こうした経緯からその

いとぐち ひら はこだて かい とうきやう こころ  
緒を開いた。函館のグロリア会、東京の心

ともしび びやうしや ふきやうかい なご や あい じつこうんどう  
の灯、病者の布教会、名古屋の愛の実行運動

ほんぶ い か きやうと こひつじかい  
本部 (以下AJUという)、京都の子羊会のリー

ダーたちが、準備会を開き、会結成に向けて

あら いっぱ ふ だ かくにん  
新たな一歩を踏み出すことを確認した。

どうねん がつ だい かいめ かいごう も こころ  
同年5月、第2回目の会合が持たれた。心

ともしび かなざわまことし びやうしや ふきやうかい  
の灯の金澤 洵氏、病者の布教会のスロイテ

ル師、AJUの山田、そして子羊会の伊達よし

え氏とシスター・マリー・エリスが、京都の

メリノール女子修道会本部修道院 (当時)

つど はな あ きやうと あつ りゆう  
に集って話し合った。京都に集まった理由は、

だてし いどう きわ こんなん しゆうどういん  
伊達氏の移動が極めて困難であり、修道院の

こうい かいじやう むしやう ていきやう  
厚意で会場を無償で提供していただいたこと

からだった。以来、月1回の集まりを持ち、

とちゆう し さそ よこはまきやうく  
途中からスロイテル師の誘いで、横浜教区の

なからはら こし とうきやうきやうく はしもとむねあきし さんか  
中原えみ子氏と東京教区の橋本宗明氏が参加

してくれるようになった。

ふくし しみんけん え こんなん じだい  
福祉が市民権を得ていない困難な時代から

かつどう ろんきやく ぎろん  
活動してきた論客ばかりで、議論はいつも

はくねつ とき かんじやうてき  
白熱した。時には感情的なやりとりもあっ

た。例えば、規約作りにおいては二つの項目

ぎろん わ ひと そしき  
で議論が分かれた。一つは組織についてで、

だんたい ちゆうしん そしき か こじんかいいん  
団体を中心に組織化していくか、個人会員を

ちゆうしん おお ふんきゆう だんたい れんごうたい  
中心とするかで紛糾した。団体の連合体とし



ばあい、まだ障害者団体が組織されていない  
きょうく、おお、げんじつ、なか、ちいき、しょうがいしゃ  
教区が多い現実の中で、その地域の障害者に  
アプローチする手段がなくなる。結果として  
は、団体中心にしていこうと落ちていたが、  
だんたい、ちゅうしん、おつ  
団体がいない教区の人たちへのアプローチにつ  
いて、大きな課題を背負うこととなった。

もう一つは活動項目の第四条第一項につ  
いて、「福音の教えに基づいて苦しみのキリス  
ト教的意義を伝える」とした時に、いわゆる  
「おめぐみ論」に繋がってしまうのでは  
ないかと、議論が大きく分かれた。「福音は  
苦しみだけではないのではないか」という  
ことだった。「障害とは何か」から始まり、  
「障害と教義」の議論に入っていくと、各自  
の障害体験と価値観が交錯し、收拾がつか  
なくなり、感情的なやり取りにしばしば陥り、  
なかなか妥協点が見つからなかった。

このように、準備会はなかなかまとまら  
なかったが、そこに集う人たちはパパさまの思  
いを受けとめ、月1回を手弁当ながら熱意が  
しばむこともなく、口角泡を飛ばしながらも  
議論を重ね、着々と進んでいった。

## 第1回京都大会

そして、教皇が来日した翌年82年7月に、  
祇園祭のお囃子を聴きながら、京都教区カテ  
ドラルに全国の仲間が集い、カ障連は産声を  
あげた。国際障害者年のテーマ「完全参加  
と平等」をうけて、カ障連設立総会も「ミサ  
への完全参加と平等」をテーマとした。

もう一つ大きな議論があった。これは  
現実論と相まって悩んだ。障害者は経済的  
にも困難な人が多く、大会に参加するにも  
旅費、宿泊費を本人と介助者も合わせると大  
きな負担となる。旅費・宿泊費の各自負担に

じむきょくちょうしゅうにん、ないてい  
ついて事務局長就任が内定していたスロイテ  
ル師から異論が出された。「完全プール制に  
したい」、つまり、全国からの参加者の負担  
が平等になるように、というものであった。  
理想論から言えば正論だが、その資金の手当  
てをどうするかで紛糾した。

準備会のメンバーも資金がなく手弁当で  
活動しているのに、参加者全員の資金手当に  
は誰もが議論できなく沈黙するしかなか  
った。その沈黙を破って伊達氏は、「私が教区  
の皆さんにお願いして責任を持ってできる限  
りのことをしたい」と申し出られて、全国  
の仲間と関係者は5,000円を個々に負担して  
もらい、それ以上の経費についてはカ障連で  
努力することで収まった。しかし、何人の  
参加者が集うか、どの地域から来てくれるの  
か、見当がつかない中で大きな不安を抱えた。

## 活動資金造りの苦勞

全国組織は1回会議を開いても大変な経費  
が必要となる。役員は自己負担では活動は続  
かない。カ障連が「団体の連絡協議会」の形  
となったことでさらに困難となった。「神さ  
まに任せれば」と言う伊達氏の言葉も励み  
にはならず、大きな負担になった。10団体  
も満たない組織で、個人会員制度が否決され、  
いかに活動資金を捻出するかを一番の課題と  
して背負った。

活動資金を得るためにラッフル券（富く  
じ）を発行し、全国の教会や団体に協力を仰  
いだこともあった。しかし、これは法に抵触  
してはいないかと、社会面トップで取り上げ  
られることになってしまった。事前取材もな  
く全国版で掲載され、その後、警視庁から  
直接電話があり、「賭博及び富くじに関する

つみ うたが 罪の疑いがあり、かんけい書類は捨てないように」  
と指示を受けて肝を冷やした。共助組合の  
かんけいしゃ 関係者もラッフル券で活動資金を得ていただ  
けに、そちらにも迷惑をかけてしまった。活動  
しきんづく 資金造りには頭を痛め、暗礁に乗り上げた。

## 力障連の理念とナイス運動

きょうとうきょうく 京都教区の皆さんの大きな支援があり、  
きぼう ゆめ 希望と夢はでっかく持って船出した。力障連  
の理念を「人はみな兄弟」とした。それまで  
しょうがいしゃだんたい 障害者団体は、肢体・聴覚・視覚・知的・  
せいしん 精神と、障害ごとに別々の縦割りであった。  
なか 那中であって唯一「全ての障害を越え兄弟  
つど ひと として集い、人として、同じ信仰をもつ仲間  
かつどう として」活動していくことで、障害は社会が  
つく 作り出しているという国連の考えを一步先取  
かい りねん りし、会の理念としたことは、今でも評価で  
きることの一つだと確信している。

しかし、僕は会長という大役を仰せつかつ  
たが、役員が1回集まると、旅費と宿泊費  
やく まんえん 約60万円から70万円の資金が必要で、カ  
しょうれん 障連の意思統一をどうやって図っていくのか  
けんとう 見当がつかなかった。全国組織の厳しさを味  
だて し 伊達氏は設立総会を成功させた自信  
すべ かみ からか、「全て神さまのおめぐみです」と  
ゆうぜん かま 悠然と構えていたが、当てのない中、資金造  
あくせんくとう りに悪戦苦闘しながら活動も始め、その後、  
なん 何とか形になってきた。

とうじ 当時はナイス（NICE・福音宣教推進全国  
かいぎ うんどう はじ 会議）運動が始まったこともあり、力障連  
としても障害者の声をナイスに届けようと、  
ふた かつどう と 二つの活動に取り組んだ。一つは各教区で  
しょうがいしゃ 「障害者のつどい」を持ち、生の声を集めてナ  
いすに届けようというものであった。役員  
のいる教区ではすぐに「つどい」の開催を決めた

が、残念ながら実際に開催できたのは名古屋  
きょうく 教区だけだった。障害者の立場というかその  
い ち 位置づけは、どの教区でもまだ認められてい  
なかつた。これが教会の現実とも言えた。

名古屋教区では、当時相馬信夫司教とスロ  
イテル師をゲストに迎え、「ナイスとは何か」  
「ナイスに障害者の思いをいかに受け留めて  
いただくか」の議論をし、障害者の生の声と  
しょうがいしゃ 障害者の思いを相馬司教に託した。

もう一つは、「障害者の日」を制定して欲  
しいという要望を司教団に提出し、教会の  
なか 中での障害者についての正しい理解を願っ  
た。「バリアフルな（バリアフリーの対義語）  
きょうかい 教会」との肢体不自由者の声や「教会の  
けいじばん 掲示板も紙ベースだけでなく音声案内が欲  
しい」との視覚障害者の声、発達障害者の  
たどうこうどう 多動行動に対して他の信者から冷ややかな  
しせん 視線や心ない発言があるとの声、聞こえない  
ひと 人のミサをしてほしいなど、さまざまな声が  
しょうれん 力障連に寄せられた。信徒や司祭たちに少し  
でも理解してもらいたいと願う僕たちの声  
だつた。しかし、これも司教団からはよい  
へんじ 返事はもらえなかった。

そうましきょう 相馬司教からは「障害者の日」を制定する  
のではなく、今後も毎年7月第3日曜日に  
しょうがいしゃ 「障害者のつどい」を開催し、障害当事者か  
ら発言し、教区の信徒の人たちに理解を得る  
ほうが実質的だろう、とのアドバイスをいた  
だき、以来26年間（当時。2023年で38回目  
を迎える）「つどい」を実施している。残念  
ながら未だ障害者の声をくみ取る仕組みのな  
い教区がほとんどで、力障連の活動の限界と  
きょうかい 教会の大きな壁を感じている。

## 力障連活動から生まれたもの

聴覚障害者からは、教会の専門用語に対応する手話表現がないという声が多く寄せられた。司祭の説教が全く聞こえない人が目の前にいて、これまでの長い教会の歴史の中で誰も不思議に思わなかったことが信じられなかった。僕は、ヨハネ書冒頭の「始めに言葉があった」にとっても感動し、霊名をヨハネとしてもらっただけに、聴覚障害者は神の言葉の語彙を持たないとは思ってもみなかった。

早速、教会手話用語づくりに取り組んだ。障害の種類によって意見の相違があり、混乱があったが、力障連は調整役に徹し、完成した。しかし、「ミサの時に通訳者がいると目障りだ」、「目立とうとしてやっている」などの意見が出たり、「私の教会でも手話が欲しい」とか、ある障害者団体からは「人はみな兄弟なのだから、聴覚障害者だけが個別で集まることは主旨とは違う」など、さまざまな声や難題が寄せられた。

社会の中で障害者は、さまざまな差別や偏見にあってきた。階段があるために電車に乗れず、お店からは「障害者はいない」と追ひ払われ、家族からは虐待を受けたり、「気持ち悪い」、「お前は一生病院か施設に入っている」とののしられ、障害者の居場所がなかったりと、つらい思いをいっぱいしている。力障連の仲間アンケートをしたら、教会の中も差別と偏見に満ちていることが明らかになり、教会も障害者には厳しく、社会と何ら変わらないと実感したこともあった。「教会はバリアだらけで使い勝手が悪い」「行きたくても行けない」という声にこたえて、カトリック中央協議会が動き、力障連と一緒に「誰もが使える教会建築マニュアル」作りに

取り組んだ。東洋大学の高橋儀平氏に手伝っていただき、当時では最も進んだ建築マニュアルの一つと言われるものを作った。

また、話すことができない聴覚障害者や言語障害の重い人たちに対する教会の対応については、大いに苦慮した。

3年に一度の割合で総会と大会を開催してきたが、回を重ねるごとに顔馴染みもでき、言いたいことが素直に言える雰囲気が出てきた。その中で「3年に一度だけで、会の方針を決めるというのはおかしい。もっと議論を尽くせ」と言う声が寄せられ、総会のない年に研修会を開催して、皆で深く議論する場をもう設けることになった。

僕はそれまでの障害者運動の中で、大会などのノウハウを持っていたし、カトリック研修センター（当時）も名古屋にあったので、当時機動力があった名古屋教区が研修会の開催の役を担った。その分、名古屋での総会開催は免じていただいていたが、研修会が東京で開催されるようになり、来たる2012年には名古屋で創立30周年記念総会と大会が開催されることになり、僕たちで実行委員会を受け持つことになった。

## 力障連に託す

日本の教会の450年の歴史の中で、教皇が初来日するという記念すべき出来事を機に力障連は発足した。僕たちは、単に有志で障害者運動をしてきたというだけでなく、わが国における教会活動の中でも、大きな意義を持つという思いを背負いながら活動してきた。その思いは、わが国がカトリック信徒の人口比率が世界で最も低い国の一つである宣教国としての自覚を、僕たち障害者も

どのように形にし、具体化していくかが使命であるという意識に至った。

故相馬司教が「黙って、跪いて、足を洗いなさい、それがお前の仕事だ」と言われた言葉は忘れない。「教会が福祉だ」という司祭は多い。しかし、社会的弱者と言われる障害者にとって、教会は必ずしも居心地がよいとは言えない時が間々ある。

僕自身、福祉の原点はイエスの行動に尽きると言い続けてきた。僕が隣人になることは「行ってあなたもそうしなさい」という教えを実行することから始まった。カ障連での活動も、まさにその教えに原点を置くように努めてきた。その反面、神から「利己と個性と主体性」を与えられた。この矛盾の中で苦闘してきた。これは障害者だけの課題ではないだけに、カ障連としてよい解決を見出せなかった。

「行ってあなたもそうしなさい。」というイエスの言葉の実践がミッションだ。理念でも、理屈でもない。今、目の前にいる困難を抱えた人に対する支援の実践が、カ障連の役割であり、使命だと信じ、今後もその姿勢はいつまでも続けて欲しいと託したい。これこそがパパさまの思いに応えることだと信じている。

## カ障連41年間の主な活動

事務局長 小池 政男

### I 教皇ヨハネ・パウロ二世来日とカ障連設立

1981年国際障害者年に教皇ヨハネ・パウロ二世来日を機に全国の障害者団体・

有志で集い、翌年の1982年京都で第1回全国大会を開催しカ障連を設立致しました。

なお、カ障連のシンボルマーク「わ」は山田初代会長の依頼を受けた、当時教皇様の日本語担当をされていた神父様から教皇様にお願ひして頂き、教皇様が直筆してくださったものです。

意味は一人ひとりの人間が集まって、ひとつの輪になって、心と力をあわせて、一緒に進むこと、平和と完全を表す「円」の形で、そして私たちがキリストの精神によって歩むことを「十字架」の形であらわされています。

### II 設立の目標と活動方針

- 1 目標：病者・障害者が生きるキリストの一員として社会の福音化を目指す。
- 2 主な活動方針
  - ①福音の教えに基づいて苦しみのキリスト教的意義を伝える。
  - ②病者・障害者が持つ問題を収集して教会・社会に反映する。
  - ③教会の設備・諸機構が全ての人に開かれたものになるように活動する。
  - ④社会と共に歩む教会の一員として、志を同じくする諸団体とも協力して病者・障害者の福祉の向上に努める。
  - ⑤機関誌を発行する。

### III 具体的な活動

- 1 全国大会の開催  
全国各地で基本的に3年に1回の開催を行ってきた。  
第1回京都、第2回大阪、第3回横浜、



第4回仙台、第5回東京、第6回広島、第7回高崎、第8回大阪、第9回東京、第10回新潟、第11回名古屋、第12回札幌、第13回横浜、そして今回の第14回は長崎で開催。

※全国大会開催に合わせて開催教区を中心  
に障害者への理解を深め、カ障連の  
加盟団体設立要請と、全国から一人でも  
多くの人に参加しやすいよう交通費補助  
のための寄付を募って頂いている。

- 2 研修セミナーを年に1回開催
- 3 加盟団体意見交換会を年1回開催。  
情報の共有化を図る。
- 4 機関誌「わ」を年に3回発行。その時々  
に合わせた内容を掲載。今回の長崎大会  
案内の特集号は機関誌「わ」98号。

#### IV 今までの41年間の主な活動

- 1 DPI（国際障害者運動のネットワーク）国際会議に参加及び日本支部設立に  
寄与（1984年）
- 2 手話ミサの手引き作成（1986年）
- 3 アジアの障害者の自立支援研修開催  
（1992年～2005年）  
研修を受けた方が、後に国連で  
障害者権利条約設立のために活躍され  
た。
- 4 カ障連を支える会設立（カ障連を  
資金面で支える会 初代会長 相馬信夫  
名古屋司教（1993年）。現在は前田万葉  
枢機卿）
- 5 福音宣教推進会議に参加（1987年）
- 6 「障害の重荷をともに担える日を目指  
して」作成、日本司教団人権福祉委員会  
に提言、検討され発行された（1996年）

7 教会が「神の国」建設に寄与するため  
に障害を持つ人からの提言。司教団に  
提出（2001年）

8 DPI世界会議が日本の札幌市で開催。  
山田初代会長は議長として活躍（2002  
年）

9 カ障連ホームページ及びフェイスブッ  
ク開設（2004年）

10 カ障連創立30周年の名古屋大会開催  
で30年史作成（2012年）

11 初めてカ障連顧問司教に前田万葉  
枢機卿就任（2012年）

12 全国の953教会に障害者に対するア  
ンケート実施（2017年）

①回収率34%。障害者は1.1%しか把握さ  
れていなかった。これは日本の障害者率  
5.6%、世界の障害者率10%に比べ  
把握率が低いことが分かった。

②障害者への配慮として、障害者用トイレ  
やスロープ等ハード面の対応は考えて  
頂いているが、特に点訳や音訳、手話、  
要約筆記等ソフト面はかなり対応が少  
ないことが分かった。（機関誌「わ」81  
号・82号・88号）

#### V 第13期活動報告 2018年～2023年

- 1 役員会：対面5回、コロナ禍でオンラ  
イン29回開催（原則月1回）計34回
- 2 加盟団体意見交換会：対面とオンライ  
ンのハイブリッド方式で開催  
①2022年3月20日 東京真正会館  
②2023年5月20日～21日  
名古屋南山学園研修センター
- 3 研修セミナー開催（機関誌「わ」及び  
オンラインで開催）

①2020年4月18日開催予定がコロナ禍で中止。しかし講演内容は機関誌「わ」90号に掲載。

テーマ「障害者差別解消法」、サブテーマ「医療モデルから社会モデルへ、そして福音モデルへ」

講師：中西由起子氏（アジア・ディ سباビリティ代表、DPI日本会議会員国際部長他）

②オンライン 日時：2021年12月12日

テーマ「みんなで助かるための福祉×防災×コミュニティ」

講師：湯井恵美子氏（福祉防災コミュニティ協会福祉防災上級コーチ）（機関誌「わ」95号）

#### 4 フランシスコ教皇来日（2019年）

①教皇のメッセージ「障害のある人を受け入れる教会を」が全世界に発信されたことに対して教皇様に感謝礼状をお送りした。（機関誌「わ」87号）

②来日に合わせて日本司教団会長の高見大司教様と担当の大塚司教様へ「障害者のためのミサ開催」及び「障害者が参加しやすい状況」の要請を行った。

③東京では事前に下見の機会を作って頂き、各障害者からの要望を聞いてくださり、障害者にとって素晴らしいミサを体験することが出来ました。

④特に全国の障害者からの参加受付をカ 障連が全て担当を委任された。

各障害者参加者に対して、誘導、案内、席の確保、音訳、点訳、要約筆記、更に初めて音声ガイド（視覚障害者のための実況中継）をすることが出来、大いに喜ばれた。（機関誌「わ」89号）

⑤東京・長崎に参加した人々からの報告を受けて、良かったこと、配慮して欲しいことを率直に司教団に報告。（機関誌「わ」89号）

⑥高見司教団会長より、教皇来日時の当会の支援への感謝と今後の全国的な大会等では、力障連の報告書を参考に障害者へ配慮して開催する旨の感謝状を頂くことが出来ました。感謝状は別紙掲載（機関誌「わ」91号）

5 横浜教区司牧者からの「障害者への合理的配慮」の講演依頼を受けましたが、コロナ禍で中止。「小教区における障害者への合理的配慮について」書面にて提出。（機関誌「わ」91号）（2020年）

6 「パラリンピック開催賛否について」紙面で問いかけをしました。（機関誌「わ」94号）（2021年）

7 全国の「障害のある仲間を知ろう」についてはまだ知らない全国の仲間と繋がるためのアクションを引き続き検討していくこととした。（2023年）

加盟団体の紹介や全国にある障害者施設のリストアップを行い、逐次コミュニケーションを交わしていくことに致しました。第14期も引き続いていきたいと考えています。

8 「障害者差別解消法」が、教会や社会で更に反映されるために手引きを作成し長崎大会で発表。その後も第14期で検討を深めていく。

日本カトリック司教協議会  
CATHOLIC BISHOPS' CONFERENCE OF JAPAN



T135-8585 東京都江東区潮見二丁目1番10号 日本カトリック  
JAPAN CATHOLIC CENTER,  
110-10-10, SHIOMI 2-CHOME, KOTO-KU, TOKYO 135-8585, JAPAN  
Key Tel. 03-5632-4411. Fax. 03-5632-4453

p^Q-p [¥] ○ CBCJL20-32

2020年6月4日

日本カトリック障害者連絡協議会

会長 江戸 徹様

日本カトリック司教協議会

会長 高見三明



フランシスコ教皇来日記念ミサに関する報告書提出御礼

+キリストの平和

紫陽花の美しい季節となりました。

常日頃からカトリック障害者連絡協議会の会長としてのご奉職にご尽力いただき、ありがとうございます。

さて、昨年11月の教皇来日時のミサ準備にあたりましては、カトリック障害者連絡協議会の江戸会長様をはじめとして、役員や会員の皆様に貴重なお時間をいただき、多大なるご協力いただき、ともに教皇様をお迎えできたことを大変嬉しく思いました。また、本年2月25日付書簡にて、教皇来日記念ミサに参加しての日本カトリック障害者連絡協議会からの報告書を、私と大塚司教宛にお送りくださり、ありがとうございました。教皇ミサに参加された皆様からの忌憚のないご意見をまとめていただき、お送りいただきましたことに心より感謝申し上げます。お送りいただいた報告書は、3月の常任司教委員会の際に、委員司教たちに紹介させていただくとともに、常任以外の司教たちにも送付させていただきました。教皇ミサにご参加いただき、ご協力いただいた各団体や皆様からのご意見は大変貴重なもので、今後、全国規模の大会において、とても参考になるまとめとなっておりますので、大切に保管し、折あることに見返しながら、良かったと言っていた点はより一層充実させ、ご指摘いただいた点は反省とともに、今後どのようにしたらよりよくできるかを考えながら、ともに働き、分かち合い、共感する場として全国規模の大会を実施する際に役立てていく所存です。本来でしたら、報告書をいただいた後、すぐに御礼を申し上げねばならないところ、このように御礼が遅くなってしまいましたことを深くお詫び申し上げます。

今後とも、お気づきのことは折に触れてご提言いただき、ともにすべてのいのちを大切に、守るための働きに尽力して参りましょう。

取り急ぎ、感謝と御礼まで。

祈りのうちに

# まえ じぶん ひと 前の自分よりいい人に

ぜん しょうれんかいちよう みやなが ひさと  
前力障連会長 宮永 久人

けいついそんかい たお ねん ほうもんかんご  
頸椎損壊で倒れてからまる3年。訪問看護  
による摘便、浣腸、デイサービスでの入浴の  
日々である。導尿カテーテルを差し込み、そ  
の交換に定期的に通院する。カテーテルのつ  
まりは急性腎不全を引き起こすので、要注意  
である。在宅生活開始後、今までに2回、  
尿路感染のため救急搬送されて入院した。

がしゆつ たお はんとし  
外出はままならない。倒れてから半年の  
入院後、枚方から出たのは2回だけで、行先  
はいずれも病院である。電車にも乗っていない。

このようななかで神の恵みを感じ、それに  
支えられていると思う。

ヘルパーの中にキリスト者が数人（うち  
一人はカトリック）であり、私の信仰に理解  
を示してくれる。コロナ禍のなかで、ネット  
による対面システムが広がり、大阪教区の  
手話・要約筆記グループがオンライン手話ミ  
サを始め、私を誘ってくれた。大阪の仲間  
みなさんに感謝している。

その大阪の仲間の人たちが、拙宅を訪ねて  
きてくれた。また、畏友の司祭の来訪は晴天  
の霹靂であった。

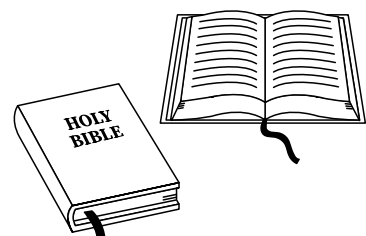
メッセージやメールを駆使して、東京  
の敬愛するシスターとも連絡が取れ、その流  
れである司祭が来てくださり、中断していた  
翻訳出版の引き継ぎができたのは幸いだった。

「人ってのは病気になると前の自分より

いい人になれる」——NHKの日曜日午後11  
時から放映される海外ドラマの中の「DOC  
明日へのカルテ」（1月15日放送分）で、  
主人公の医師アンドレア・ファンティが患者  
に言ったことばである。

病まうことはさまざまな意味で人生の転機  
だろう。私の場合、倒れたことで身体に、  
脳性マヒに起因する余分な力が入らなくな  
り、落ち着いて話せるようになった。そのた  
めコミュニケーションが滑らかになり、静か  
に思考することができるようになったと思  
う。また、先述のとおり、病のなかで神と  
出会い、神に賛美と感謝を捧げることができ  
るのは大きな喜びである。

救われたこと、そして多くの方々に支えら  
れていることに感謝しつつ、祈りのうちに歩  
み続けたい。いつか長崎大会が開かれること  
を祈りつつ。



れんらくさきおよ にゆうかい もう こ さき  
**連絡先及びご入会の申し込み先**

じ む きょく な ご や し しょうわくえほうちよう  
事務局：〒466-0037 名古屋市昭和区恵方町2-15  
な ご きょく ふくしいんかいしつない  
名古屋教区カリタス福祉委員会室内  
にほん しょうがいしゃれんらくきょうぎかい  
日本カトリック障害者連絡協議会  
Tel：052-852-1426 fax：052-852-1422

ゆうびんきょくふりかえこうざばんごう  
郵便局振替口座番号：00100-7-31254

どうふう ふりこみようし りよう  
(同封の振込用紙をご利用ください)

かい ひ ねんかん くち えん  
会 費：年間1口 1,000円  
(団体 10口以上 個人 1口以上)

かにゆうしゃめい にほん しょうがいしゃれんらくきょうぎかい  
加入者名：日本カトリック障害者連絡協議会